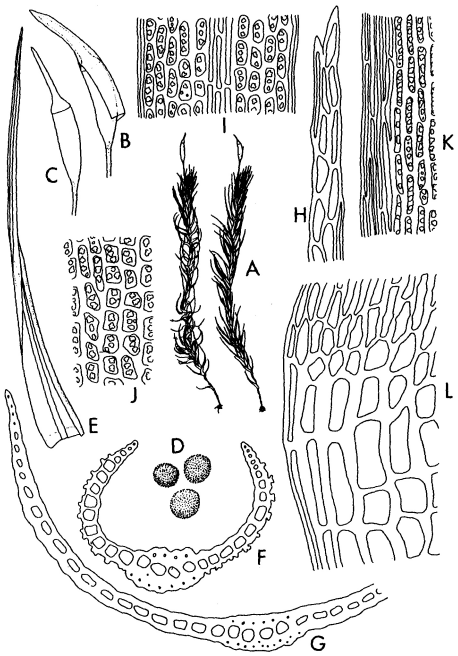
イボマツバゴケ　*Leucoloma okamurae* Broth.

【評価理由】

日本固有種で本州、四国、九州に分布する。本州といっても中部以南が主産地で鳳来寺山頂（新城市、695m）が本県では唯一の産地。ここは日本における分布の北限線上にあるものとして重要である。

【形　態】

本種の属するマツバゴケ属（*Leucoloma*）の種の葉は葉縁が舷とよばれる透明な細長い細胞列で縁取られているのが特徴。日本産の本属には他にもう一種マツバゴケ（*L.molle*）があるが、より大型で茎の下部の葉がよく脱落し、中肋ぞいの葉身細胞には全面に小さな乳頭がある。イボマツバゴケは小型で葉は脱落せず葉身細胞には大きな星形の乳頭が縦に並んでいる。和名のイボはこの特徴に基づいている。



A.全形. B.蒴帽をつけた胞子体. C.胞子体. D.胞子. E.葉. F,G.葉の横断面. H.葉の先端. I.葉の中央. J.葉の中央.細胞. K.葉縁の舷 L.葉翼の細胞. (高木典雄･成田務,2000 原図より).

【分布の概要】

【県内の分布】

唯一の産地は鳳来寺山頂（新城市）の標高約 695m の地点。

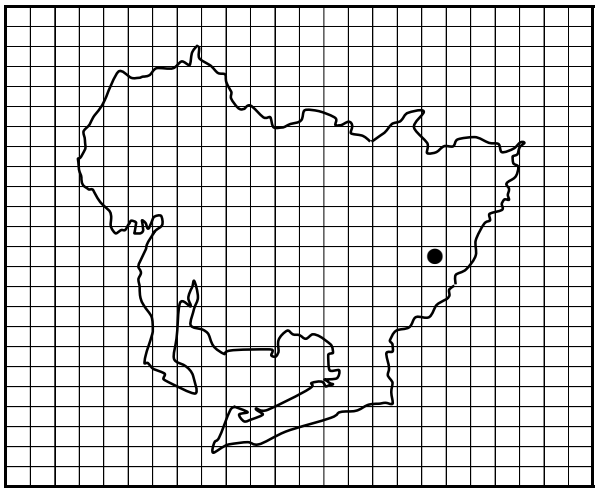
【国内の分布】

本州中部以南、四国、九州に分布する。

【世界の分布】

日本固有種である。対照的に同属の一種であるマツバゴケは九州以南から沖縄、台湾を経てフィリピン、インドネシアに分布する。

県内分布図



【生育地の環境／生態的特性】

県内唯一の産地である鳳来寺山頂では、アカマツの樹幹に着生していた。本種は暖地系の種で、林内陰地の樹幹や朽木上に群落を作る場合が多いが、鳳来寺山のように山頂近くの半陰地で、しかもアカマツの樹幹に確認されたという例は珍しい。

【現在の生育状況／減少の要因】

県内唯一の産地は鳳来寺山頂（瑠璃山、標高 695m）で、アカマツの樹幹に着生していた。周辺は半陰の疎林であったが、その後山頂一帯は環境が変わり、このアカマツも消滅し、イボマツバゴケも共に消滅してしまった。現在のところ、愛知県では第 2 の産地はまだ見つかっていない。

【保全上の留意点】

樹幹着生の種は、その生育を支えている母樹そのものが消滅すると消滅するため、母樹そのものの保護が重要である。また、新たな産地発見の可能性は残されているため、県内における第 2、第 3 の産地の発見が望まれる。

【特記事項】

暖地系のセン類で、本種が愛知県で見出されていることは愛知県のセン類フロラの性格を示す重要な資料になる。

【関連文献】

高木典雄･成田務, 2000. 姿を消したと思われる鳳来寺山蘚類の 3 種. 鳳来寺山自然科学博物館館報, 29: 5-10.
成田 務, 2016. 新城市の貴重なコケ植物. 新城市の自然誌 植物・きのこ編, p.305. 鳳来寺山自然科学博物館, 新城市.